



第1話

ギルモン誕生！

めざせデジモンテイマー

第二稿 (Revision 2)

脚本／小中千昭

Animation Play by Chiak J. Konaka

2000／11／17

登場人物

松田 啓人「タカト」(10)

李 健良「リーくん/ジェンリヤ」(10)

牧野 留姫「ルキ」(10)

ギルモン

テリアモン「今話登場せず」

レナモン

クルモン

淀橋小学校

浅沼奈美(26)……………担任教諭

塩田 博和(10)

加藤 樹莉(10)

級友たち

両親達

松田 剛弘(41)……………タカトの父親

松田 美枝(35)……………タカトの母親

李 小春(07)……………リーの妹

アバンのデジモン

レナモンと対決するデジモン

死闘／抽象化されたデジタルワールド

荒野、ではある。しかし光の明滅と共に浮き上がるグリッドが、そこを三軸座標上の 絶対的なる場所である事を示している。

そこは、見慣れたデジタルワールドではない。人間が産み出した、徹底的に人工的なる電子のエーテルに満ちた世界。

その中で、勝ち獲られた野生。それがデジモンなのかもしれない――。

肉食獣と同質の咆哮。 軋む金属音。

二匹のデジモンが、各々の持てる力を賭して全力で相手を倒そうと戦う。

見慣れたデジモンの質感ではない。またモーションの揺れも、ブラーではなく量子化ノイズで表される。一匹のデジモンが形勢不利となる。

相手は「勝った」と思った。

しかし――、突如、地に伏していたデジモンは光に包まれ――、それまでそこに存在し得なかった 武装 を身にまとった。

一気に反撃に出るデジモン。

勝負が、ついた。

破れたデジモンは、ゆつくりと、地に崩れながら、量子化ノイズに分解し――、デジタルのデータとなつて、勝利したデジモンの体内へと吸収されていく。そこに残る事を赦されたデジモンに、勝利の喜びの様な感情は見られない――。

タカト、「(オフ) やったっ！ 勝ったぞ××モン！」

学校裏手の公園／朝

古い公団アパートに囲まれた小さな公園。

ブランコに集まっている小学生の男の子たち。

ヒロカズ「っかーっ。あそこでそういうカード使うのアリかよー」
タカト「あはっ。とっさに選んだんだけどね」

タカト、自分のデジモンを勝利に導いたブースターカードを小さな市販のデジバイスにスロット。ピ。データが浮かぶ。

タカト「（呟く）ふうん、このカード、こんな隠しパラメータがあったんだ……」

と、既にランドセルを背負って公園を出ようとしているヒロカズたち。

ヒロカズ「タカト！ 遅刻しちゃうぞー」

タカト「わっ、待ってよ！」

タカト、慌てて自分のカードをかき集め、デバイスと一緒に菓子缶の中突っ込む。

タカト「あうっ」

慌てた弾みに、バラバラとカードを地面に落としてしまう。

必死に拾い集めていると――

タカト「れ？」

拾い上げる一枚の、群青のカード（「ブルー・カード」）。うっすらとデジモン文字が描かれているだけ。

タカト「こんなカード、ぼく持ってたっけ……？」

タカト、そのカードをデバイスに、スロットさせる。ーん……。液晶がバグって、ザワザワと蠢く。

タカト「え……？」

学校から始業のチャイムが聞こえた。

タカト「あっ、えっ？ まままずいっ！」

公園の隅の時計台。その土台の裏側に、ちょうど箱が収まる隙間があって、そこに箱を入れるタカト。

学校に向かって駆けていく子どもたち。

学校のすぐ向こう側には、西新宿の超高層ビル群。

中央公園のすぐ西側にある小学校。
主校舎の上の方の教室の窓の一つに、タカトの横顔
が見える。

同ノ五年二組教室

未だ若いが、既に教諭という職に理想を見失つてい
る浅沼奈美。生徒に接する時に、常に無意識に仮面
を被っている。

黒板に萩原朔太郎の詩を書きながら、チラと教室の
生徒達を見る。

生徒達は小声で喋り合ったりしている。

ふと窓際のタカトを見ると――、熱心にノートに書
き記している。

奈美「――」

タカトがノートに必死に書いていたのは詩ではな
かった。

それは――恐竜型デジモン。

タカト「――色は、赤だ。一番強いんだもん。成長期の最大攻撃
力はアグモンに匹敵。でももつと強い。必殺技は――」

奈美の声「――それ、怪獣？」

タカト「（笑み）何言ってるの。これはデジモン――（はっ）」

見上げると奈美が無表情にノートを見下ろしていた。
奈美「――タカト君は真面目にあたしの授業、聞いてくれてる
と思っただけにな……」

タカト「――ご、ごめんなさい……」

奈美「怪獣の絵を描いてる方が、あたしの授業より楽しいんだ」
タカト「ちっ、違います！ 僕の描いてたのは怪獣とかじゃなく
デジモンで、でもただのデジモンじゃなくて僕が考え
たっていうか、あっそうじゃなくて先生の授業は……」

奈美「――」

同／放課後

ガランとした教室に、タカトだけが席に座って原稿用紙に向かっている。

タカト「――授業中にデジモンの絵はもう描きません——つと……はあ……」

ふと、さっき自分が描いた赤いデジモンの絵を見る。
タカト「――」

ハサミでノートを切り抜くタカト。ちょうどデジモンカードの形。そう、タカトのデジモンの、カード。タカト「（カードを掲げ）ギルモン！ 龍騎タイプのワクチン型成長期！」 適切な属性に適宜変更。

女子の声「わん」

タカトのすぐ脇に、ミヨーなぬいぐるみの犬。

タカト「わっ」

首をすくめ、ゆっくりと振り向くタカト。

可愛い少女が、悪戯っぽい笑みを浮かべ、タカトの後ろに立っていた。手踊りのぬいぐるみで挨拶。

樹莉「わんわん。まじめに反省文書かないと怒られるよー」

タカト「――な、なんだ、加藤さんが。脅かさないでよ」

樹莉「（くすくす）」

樹莉、自席の机の中を覗き込んで、笛を出して鞆に仕舞う。

タカト「（ちよつとどきどきして樹莉の所作を見ている）」

樹莉「じゃあね！タカト君！」

タカト「あっ、えつと」

駆け出ていく樹莉を、眩しそうに見送るタカト。ずっと手にしていたギルモン・カードに目をやる。

タカト「……」

小学校外観／西新宿副都心

ビル群の上にはそこにアンテナ。

鉄塔、パラボラ――。

輻輳する声が微かに聞こえる。

ーん……ーん……。

都庁舎最上部構造の壁面に、密生したキノコの如く
ひしめくアンテナ群。

そこから見下ろされる世界は――、現実（リアル・
ワールド）と重なる、ネットワーク（デジタル・ワ
ールド）。

デジタル・ワールドノイメエジ

抽象的な光の世界。キュビズム的な人工の秩序。

激しく往来する輝点（データ）の奔流。

女の声「（事務的）異常パケットが増殖中です」

男の声「ワールド・ワンか！ トレイサーを撃て」

女の声「追尾出来ません！」

光の奔流に逆らって、真っ赤なグリッドが急速にネ
ット内を駆け抜けていく――。

二人はデータ管理局員

学校近くの公園

一人、やってくるタカト。

ザワ！ 風が吹き、木々が揺れた。

タカト「――！？」

時計台の下が、ぼう、っと赤い光に包まれている。

タカト、慌てて近づく。

その光、ごく弱いながらも、ゆっくり明滅していた。
タカト「（少し怯えている）なん、で……」

裏側に回るタカト。

光は、隙間の菓子缶から漏れていた。

タカト「――」

意を決して、タカト、手を伸ばし菓子缶を取り出す。

タカト「――！！」

一気に開けるタカト。

カードの山の中に、カードリーダー・デバイスが、淡く光っていた。

その光、しかし収束していく。

タカト「何なの……？」

と——、光が収束し終わると、デバイスの形が違うものになっていた。

タカト「形が——変わった……」

見回すタカト。カード・リーダー、ボタンなど、どう見てもデバイス。

タカト「何で——あっ！」

フラッシュ

タカト「こんなカード持ってたっけ……？」

タカト、青いカードをデバイスにスロットさせる。

公園

タカト、缶の中のカードをかき回す。

しかし、あの青いカードはもうそこには無かった。

タカト「……」

西新宿地下通路

都庁から新宿駅へ連なるトンネル。

勤務から帰宅していくサラリーマン、OL達の雑踏が一方方向に流れていく。

その通路の柱の影に——、淡く白い靄が立ち昇り始めていた。

誰も気に留めていない。

やがてその靄——、ある 形 をとり始める。

まるでそれは、ぬいぐるみの様な愛らしい姿の——

けやき橋商店街

中央公園裏を走る道。高層ビル街の反対側は、昔ながらの住宅が密集している。その一角の、ごく短い商店街。タカト、手にあのデバイスを手にし、思案気に歩いて来た。

タカトの家ノ店内

「ベーカリー・マツダ」という商店に入っていく。買い物客の主婦に釣り銭を渡している母親。

タカトの母「323円のお釣りですねー。毎度どうもありがとうございます。ございませす。お帰り」

タカト「——」

タカト、靴を脱ぎ捨て、二階へ上がっていく。

タカトの母「（慄然）——（いきなり大声で）ただいまお母さん今日は学校とーっても楽しかったよ！」

と——、ややして階段をささっと降りて顔を覗かせるタカト。

タカト「ただいま」

さつとまた上がっていく。

店奥は小さなパン焼き工場。そこから出てくる父親。

タカトの父「どうした」

タカトの母「別に。毎日きちんと親子の会話してしないとねって」
タカトの父「——（おもむろに階上へ）タカトおかえり」

横目で睨む母親。

タカトの部屋

タカトの部屋の窓からは、僅かに軒の向こうに高層ビル群の窓の灯が見える。

タカト、椅子に座ってしげしげとデバイスに見入っている。

タカト「——なんで急に形が変わっちゃったんだろ……。あの変なカードのせい？ ひょっとして、これホンモノのデジタルアイスになったとか？」

ランドセルからノートを出すタカト。そこに挟まれていた、手製の ギルモン・カード。
タカト、カードをスロットさせる。

ピーーーーー！

タカト「えええっ!?」

スロットされたカードが、まるでとてつもない量のデータをデバイスにロード。

ぶん。虚空に浮かぶ仮想ウィンドウ。

「D-ARK Loaded GILMON Data.」

しゅん……。

何事も無かったかの様に静まる部屋。

ヒュプノス 画面

ゴオオオオオオ!

凄まじい勢いで、巨大な輝点「グリッド」が駆け抜けていく。その方向は——、上層。

女の声「新しいワールド・ワンを検知しました。急速にパワーを増大させています！」

男の声「またリアライズするつもりか!」

タカトの部屋

D・ARKを覗き込むタカト。

液晶に浮かんでいるのは——

タカト「——たまご……?」

ピコン、ピコンと規則的に脈動しているデジタルマ。

それは単なる液晶の表示するデータにすぎない。

しかし——、あたかも生の脈動を伝えているかの様。

タカト「何が——生まれるんだろ……!」

中CM

西新宿副都心 / 深夜

灯の消えた、墓標の様にそそり立つ都庁。
車通りの絶えた——、人が生活しない、街——。
大きな月がそこを照らし出していたが——、
ポツリ、ポツリと滴が落ち始めた。
しのつく雨が、春の夜に、降る。

タカトの部屋

部屋の電気を消して、ベッドの中で眠っているタカト。楽しい夢を見ているらしい。

タカト「——（寝言）ギルモン……、進化あ……」

タカトの手には、D・ARKがしっかりと握りしめられている。

そして——、液晶には脈動する、卵が……。

ピキ——。卵の脈動、止まる。

眠り続けるタカト。

液晶の卵——、少しずつ、リニアな動きで、割れ目が出来ていく。

気づかないタカト。

そのタカトを、卵の中から、じっと見つめる、目。

都庁前道路

霧の様な雨が降る未明——。

全く車が走らない道路の中央に——、直径20m程のもやがドームの様に現出している。

静寂——、否。

時折、もやの中に激しい閃光が明滅。

タカトの部屋

僅かに眉を顰めるタカト。

タカト「ん……」

液晶の中の 目、タカトを見つめ続ける。

都庁前道路

ドーム状のもやの中に——、何かが、いる！

デジタル・フィールド内

それは、デジタル・ワールドがこのリアル・ワールドと重なった時に現出する干渉場。

その中では——、二つの異形が激しく戦っていた。

身の丈5mはある、獰猛なデジモンが、キツネを思わせる姿のデジモンを容赦無く痛めつける。

少女の声「レナモン！」

闘う二匹の向こうに——、少女の、影？

ビシ！ 痛撃。

××モン「ぐおおおおお」

次なる攻撃を、俊敏な動作でかわすレナモン。

少女の声「レナモン！ いつまで逃げ回っているの！ 闘いな

さいー！」

険しい少女の声が飛ぶ。

活動的なスタイルの、幼いながら鋭い輝きを瞳に持

つ少女——留姫。

キツと敵の姿を見据えるレナモン。

レナモンPOV(Point Of View / 主観映像)

デジタルズされたカメラの映像。メインのウィンドウの両脇には、敵デジモンのパラメータが——表示された！

少女の声「××モン、ウィルス型完成体 ××属性！」

——判った！ レナモン！」

タカトの部屋

ビク、ビクツ、と頭を動かすタカト。
何かを感じている。いや、見ている。

デジタル・フィールド内

レナモン「ルキーツ！」

留姫、腰のカードホルダーから数枚のカードをサツと抜き出し、一瞥。その一枚を、タカトのものと同じ形のデジバイス「D・ARK」にスロット！

留姫「カード・スラッシュ！ レナモン、アクセラレーション！」
ブースターの機能、一考。

と！ レナモンの全身が、モーション・ブラーに包まれ——、猛ダッシュ！

巨大な完成体デジモンに突っ込む！

「ごおおおおおおお！」

静寂

都庁前道路

その刹那だけ——、デジタル・フィールドは消えていた。

パジャマ姿で、呆然と立ち尽くす、タカト。

タカトの眼前では、時が止まったかの様に、全てが止まっている。

軌跡を引いて、敵デジモンに突っ込む寸前の、レナモン。

驚愕し、ただレナモンの反撃を待ち構えるだけの大柄なデジモン。

そして、タカトに背を向けて立つ、小柄な少女——。

タカト「——（小さく息を呑む）」

デジタル・フィールド内

「ごおおおおおおお！」

レナモン「×××××！！（必殺技）」

ドオオオオン！

破碎される敵デジモン。

突き抜けたレナモン、着地。

破れたデジモンは破片と散りながら——、それらは全て量子化ノイズに転換されていく。そして——、レナモンに吸収された。

タカトの部屋

ぎゅっ、とD・ARKを握るタカト。

タカト「（ハッと目を開け）——」

都庁前道路

ヘッドライトが朝もやを切り裂いて、タクシーが走り抜けていく。

道路の中央には、留姫とレナモンがいるだけ。

頬にかかる霧雨。

留 姫「——もう、朝になっちゃう……」

レナモン、闘いに疲れているのか、うずくまっていたが、留姫を見上げる。

留 姫「——帰るよ、レナモン」

歩道に向かって歩き始める留姫。

サツと起き上がり、しなやかな動きで留姫の後を追うレナモン。

空には青味の広がる、朝の雲。

タカトの家／パン工房

早朝。ミキサーが唸る。

父親がパン種の仕込みをしているところ。
作業の途中で、ふと店の方を見ると――

タカトの父「……………」

パジャマ姿のタカトが、ぼうつとした顔で店から外の窓を見上げている。

脇に並んで空を見上げる父。

タカト「ねえ、お父さん……………」

タカトの父「ん？」

タカトの父「――お父さんが子どもの時って――、デジモンとか無かったんだよね」

タカトの父「（苦笑）当たり前だ」

タカト「――でも、デジモンって、ゲームの中とかだけじゃなくってホントにもし――」

タカトの父「――？」

タカト「ううん、いいや。ごめんね、変な事言って」

タカト、自分の部屋に戻っていく。

タカトの父「……………」

タカトの部屋

ベッドに座り、D・ARKを見つめるタカト。

タカト「……………どこいつちゃったの……………？」

液晶の中には、割れた卵のかけらが表示されるのみ。

淀橋小学校外観

まだ雨が降り続けている。

教室

奈美が黒板に、朔太郎の詩を書いている。

ノートを前にしているタカト。

そのノートはハサミでカード型に切り抜かれた跡が。

樹莉「……………」
そのタカトを、離れた席からチラ、と見る、樹莉。

西新宿

雨が——、晴れた。
真っ赤な夕焼け。

帰宅する勤め人達。

現代的なデザインの街灯の上にちよこんと座り人々
を見下ろしている、小さなデジモン——クルモン。

クルモン「んーん？ どうしてみんな同じ風に歩いているですか
クル〜？」

学校近くノ路地

公園前の道を歩いていくタカト、ヒロカズら。

タカト「だつて見たんだ！ぼくホントにデジモンがいたんだ！」

ヒロカズ「けどさータカト、目が覚めた時は自分んちの部屋にい
たんだろ？」

タカト「そうだけど、でも、雨が冷たい、って感じ、覚えてる」
ヒロカズ「（くすくす）」

タカト「なっ、何？」
ヒロカズ「まさかタカト、その歳になつて、お寝しよしてたんじ
やないだろーな」

友人1「マジッ… タカト、マジおねしよした？」
タカト「しっ、してないってば！ なんだよ、どうしてそんな話
になっちゃうのさ！」

ヒロカズ「（笑）ガキみたいな夢みるからさ」

友人2「タカトおねしよー」

タカト「（むっ）……………」

笑いながら行ってしまっヒロカズ達。

タカト「……夢なんかじゃ——」

ふと、公園の時計台の方を振り向くタカト。

ヒュプノス 画面

ゴオオオオオオオ!

真っ赤なグリッド「輝点」が、周囲のデータを巻き込みながら渦となって、座標の上層を目指して上昇していく!

女の声「(事務的ではなく感情を露に)過去最大級のワイルド・ワン発見しました! あ、有り得ないです! こんなデータが——」

男の声「落ち着け。——一体どうなっちまうんだ、この……」

公園

時計台の裏。菓子缶は、普段と同じ様にあるだけ。

その前で、D・ARKをじっと見つめているタカト。卵の殻のグラフィックが映っている。

タカト「ぼくが温めてあげたのに——勝手に……」

と! 突如D・ARKの液晶に幾何学的なマークが浮かび光の筋が夕焼け空に向かって伸びる。

タカト「!?」

マンションの一室

小さい妹の相手をしていた少年・リー、ふと窓外に光の筋があるのをじっと見つめている。

小春「お兄ちゃん……?」

リー「——あの光……」

新宿東口

つまらなそうに、MP3プレイヤーのインナーフォンの音楽を聞いてた留姫——、ふと見上げる。大ガードの向こう側に、光の筋。

留 姫「——（無表情）また、来る」

公園

光の筋、D・ARKから外れ、移動をしていく。

タカト「あっ、待って！」

路地

最初はD・ARKから放たれた筈の光の筋は、今は虚空から地面へ真っ直ぐ降りている。

タカトが近づくと、その光の筋のディテイルが少し見える。

それは、デジタル・フィールドなのだ。それが軌道エレベータの様に、この地上「リアル・ワールド」に道を広げようとしている。

坂の多い町の、くねくねと曲がった路地。

そこを光の筋が移動していく。

タカトは必死にそれを追いかけていく。

タカト「待って！ 待ってよ！」

ヒュプノス 画面

輝点、まるで破裂するかの様な輝き。

女の声「ワイルド・ワン、リアライズします！」

空き地

地上げされて放置され、雑草が覆う空き地。

そこに光の筋が停止し、どんどん筋が、筒状に太くなっていく。

駆けつけてきたタカト——、愕然。

タカト「わっ！」

瞬時に、向こうの世界から現出する、タカトと同じくらいの身長のはそれは——

ギルモン「ふぎゃー」

泣き声なのか、叫び、なのか。

ふ、つと光の筋、消え、そこには、赤い恐竜の子どもの様なデジモンがいた。

タカト「——いたんだ……、やっぱり、本当に……」

ゆっくりと近づいていくタカト。

ギルモン、周りをキョロキョロしている。

タカト「——ぼくが——、ぼくが考えたんだよ、君は——」

ギルモン、目をパチクリさせ、タカトをじっと見つめる。

タカト「そうだよ、ぼくなんだよ、ギルモン、君を——」

ニヤーツ！

ギルモン、猫が威嚇して喉を鳴らしている塀の上を見上げる。

タカト「いたんだ！ ホントに本物だ！ デジタル・モンスター」

野良猫、ギルモンをじっと睨んでいる。

ギルモン、ちよつとだけ、笑った様な顔。

タカト「ギルモン！」

ギルモン「ぐわっ！」

いきなりギルモン、巨大に口を開け——、塀の上に向かって光弾を放った！

バキ！ どおおんん！ フギャー——！

塀が粉碎される直前、猫はとっさに逃げ出す事に成功していた。

崩れた塀。

ギルモン、タカトの方に再び向いて、つぶらな瞳で見つめている。

タカト「——ぎ、ギルモン……」

以下次回